
ドラゴンの秘宝

1 3 1 0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンの秘宝

【Nコード】

N18340

【作者名】

1310

【あらすじ】

ドラゴンの形をした島に生きる、とある少年。

島の伝説には全く興味が無いが、ある日突然ほしくもない秘宝の為に旅に出ることに…。旅をしているうちに様々な事実が発覚し、初めはほしくもなかった秘宝を求めるようになる。

各祠の守護龍との戦闘も見所。

ドラゴンの秘宝は本当にあるのだろうか。

その秘宝の効力とはいかに。

第一章 占い師

「デティ！！！！早く起きなさい！！！！今日はパパの命日なんだから！！！！」

「ふあゝあ…わかってるよ。」

僕の名前はデティ・フリルガント。

12歳。

母のフォーチュンと父のダリアンが付けた名前だ。

父は5年前に死んだ。

2

死因は一応事故死になっているが、噂ではこの島に封印されているドラゴンに殺されたとか何とか…。

この島はドラコアイランドと言って島全体が一頭のドラゴンの形をしているらしい。

らしいと言うのも空高くから島全体を見たことがない僕は本当にそんな形をしているのかも疑ってしまう。

僕の住んでいる村はライトウィングラムという名前だ。

名前の通りこの島のドラゴンの右翼にある村らしい。

この島には昔から伝説がある。

島にある4つの祠の秘宝を集め、ドラゴンヘッドと呼ばれる森の奥の洞窟の中にダイヤモンド湖という湖があり、その広場の窪みにそれらをはめ込むとドラゴラムアイという千年竜の瞳が手に入るといふなんとも信じがたい伝説だ。

勿論、僕は全くもって信じていない。

けど冒険家の父はそれを求めて祠の秘宝を取りに行き、秘宝を守る守護龍に殺されたといふのだから情けない。

おかげさまで村の悪ガキにはからかわれたり、いたずらされたりで毎日散々な目にあわされているのだ。

今日はそんな迷惑極まりない父の命日だといふのだから困ったものだ。

僕は、この日が一年で一番嫌いだ。

「デティ！！！！まだ寝てるの？？早く起きなさい！！」

母の大きな声と慌てふためきながらドタドタと階段を上がってくる

音が家中に響き渡った。

「ガチャッ」

扉が開くなり母のフォーチュンの顔は一気に夢に現れたことのある鬼のような顔になった。

「まだ着替えてないじゃない！！いつまで寝てるの！！！！早く起きてしたくしなさい！！」

「わかったよ。」

憤慨する母にデティは素っ気なく返す。

ドタドタ部屋から出て行く母を横目で追い、部屋から去ったのを確認すると、デティはベッドから降り、寝巻きのローブを脱ぎ捨てた。散らかった部屋に落ちている少し汚れた七分丈のズボンに鹿の皮で作られた服を着て、その上から黒色マントをはおった。

この島の男性はだいたいこんな格好である。

少しベツタリした長めの髪を書き上げ、髪の際足の部分を深緑色の布の切れ端でポニーテールに縛った。

支度のできたデティは階段を駆け下り、一階の居間のソファアに腰掛けた。

一息もつく間もなく居間に駆け込んで来た母にパンを押し付けられた。

ため息をつき、デティはパンを頬張り始めた。

パンを食べ終わるや否、家の呼び鈴が鳴った。

母は裏庭で洗濯物を干している。

デティは、残り少ないパンを口の中に押し込みながら立ち上がり、玄関へ向かった。

デティがドアノブに触れる前に扉はパツと開いた。

そこに立っていたのは、火のように真っ赤な髪をショートカットにしている猫顔の小柄な女の子

名前はリール・アレクレイ。
デティの幼なじみだ。

リールは目が合うなり叫ぶように言った。

「ちょっと!!なんで昨日勝手に帰ったわけ???日が暮れるまで探してたんだからあ!!」

(そうだ、僕は昨日リールとかくれんぼをしている途中で眠くなって勝手に帰ってたんだ。)

デティは思い出した。

デティが言い訳をしようと口を開こうとする前にリールは言った。

「まあ、いいわ。」

そう吐き捨てるなりデティの家に勝手に上がり込んで行った。

少し唖然としたが、よく考えてみればいつものことだ。

デティは居間に戻り、先ほどのソファァーに再び座った。

すると、リールが言った。

「今日のおじさんのお墓参り、私も行くのよ??」

と、なぜだか誇らしげに言った。

それもそうだ。

毎年、父の命日に集まるのは、ドラゴンの秘室の伝説を信じ、冒険家の父を誇らしく思っている頭のいかれた連中ばかりなのだ。

デティは、そんな連中があまり好きでなかった。

なぜならみんなデティに、口を揃えて言うことがあった。

それは、

「ダリアンのような勇敢な冒険家になれよ。」

だった。

僕は、冒険家には絶対にならないし、ドラゴンの秘宝なんかにも全く興味がない。

これからだってそんな存在するかもわからないような伝説に興味を持つことなんてないだろう。

デティは、そう考えていた。

デティは、結構何事にも無関心だった。

デティは、大好きなダリアンおじさんの話で一人盛り上がるリールに素っ気なく相槌を返しながら時間を潰した。

裏庭で洗濯物を干していた母が帰ってきた。

「おばさん、そろそろ行かないといけない時間よ??」

リールが言った。

「そうね。出発しようかしら。」フォーチュンが返す。

デティとリールとフォーチュンは墓参りに参列する父の知人たちが集まるライトウィングラムの村の中心にある噴水のある公園に向かった。

この公園は、デティとリールが昨日かくれんぼをしていた公園だ。

公園に名は無く、デティたちは、公園の噴水に人の体より少し大きめのドラゴンの像があることから、ベビードラコパークと勝手に呼んでいる。

ベビードラコパークに到着すると、そこには既に数十人の人が集まっていた。

みんな父の知人だ。

少し顔つきの怖い中年のおじさんが、デティたちの到着を待つてま
したと言わんばかりに近づいてきた。

この人の名前はランディ・アレクレイ。

そう、その名の通りリールの父である。

ランディがリールに言った。

「リール！！探したんだぞ！！？？デティのここに行くならママか
パパに言ってから行けてあげれほど言ってるだろ。」

リールはいつも勝手にいなくなるらしい。

勝手にいなくなるときはだいたいデティのところに来ているからさ
ほど心配はしていないようだが、リールはいつもこの事と怒られて
いた。

「わかったわパパ。それよりフォーチュンおばさんも到着したこと
だし早く出発しましょ。」

リールが話を変えるように慌てて言うと、ランディはため息をつき
つつも集団に戻り、みなに出発を告げた。

父の墓はハートマウンテンの頂上にある。

ハートマウンテンとはここから約3マイル程離れた山のことだ。

名前の通り、島のドラゴンの心臓辺りにある山らしい。

二時間ほどかけて墓に到着したデティたちを含める参列者は、フォーチュンを先頭に一列に並び、順番に墓参りを始めた。

デティは集団の中でフォーチュンとはぐれてしまったので真ん中より少し後ろに並んでいた。

前に並んでいるデティの知らないおじさんが父について熱烈に語りかけてくるのを退屈そうに聞きながら時間を潰しているうちにデティの順番が回ってきた。

デティは父の墓の前で両手を合わせ、目を閉じた。

(こつこついうとき何を考えればいいんだろう。)

デティの中で答えは見つからず、頭の中は真っ白だった。

するん、

(デティ……………デティ……………旅立て……………)

頭の中で誰かの声が聞こえた。

「えっ?？」

デティは焦って目を開けた。

そこには見慣れている父の墓があるだけだった。

「デティ!!!早く退きなさい!!!後ろがつまってるじゃない!!!」

我に返ったデティは足早に墓の前から離れた。

墓の前での出来事をまずリールに話した。

勿論リールは信じなかった。

これ以上話してもからかわれるだけだと思い、デティはリールに話すのをやめた。

次は母のフォーチュンに話した。

母も同じように信じてはくれなかった。

すると、そこに背の低い（腰を曲げているからだが）お婆さんが寄ってきた。

お婆さんの顔がデティの顔に近づく。

デティは後ずさりしてしまった。

お婆さんは、デティの目をジッと見つめながら言った。

「あんた、聞こえたのかい?? 聞こえたんだね??」

デティはそつと頷いた。

「わかったわ。今日の夜、家へおいでなさい。」

お婆さんは言った。

デティは、何も口にすることができず、お婆さんが立ち去るのをただただ見つめることしかできなかった。

ふと我に返ったデティは母のフォーチュンに訪ねた。

「今のお婆さん誰??」

母は耳打ちするように静かに言った。

「この島の有名な占い師さんよ。ちょっと陰気臭くては私はあまり好きぢやないけどね。パパはなぜだかよくあのお婆さんの家を訪ねてたわ。名前は…確か…レアディ…だった気がするわ。」

「レアディ婆さんかあ。」

デティは呟くように言った。

その日の夜はリールがデティの家へ泊まりにきた。

デティはリールの横で寝るのがあまり好きではなかった。

なぜならリールは尋常じゃないぐらい寝相が悪いからだ。

夕食を終えたデティたちはデティの部屋へ戻った。

リールが部屋に入るなり言った。

「ねえ、デティ。」

デティがリールに振り返った。

リールが少し心配そうに言った。

「あの占い師の家に本当に行くの???」

デティは正直行くつもりでいた。

「うん。」

そつと答えた。

「そう…気をつけてね。」

リールは言うなりデティのベッドに潜り込んだ。

静かになった部屋を後にし、デティは家から少し離れたレアディの家に向かった。

ベビードラコパークに行くときにいつも通る道の片隅にある家だった。

公園に行く度に

陰気くさい家だと思っていたのを思い出した。

デティは玄関の前で少し躊躇ったが、恐る恐る呼び鈴を鳴らした。

「ガチャッ！ギー・・・」

ゆっくりと扉が開き、昼間のお婆さんの姿が現れた。

お婆さんは、デティの顔を少し見つめ、不気味にもニコツと微笑み

「入りな。」

とゆっくり促した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1834o/>

ドラゴンの秘宝

2010年10月9日22時46分発行